

「神の願い、主イエスの祈り」

箴言 17 : 1, 15 : 17

エゼキエル書 37 : 15 - 19

January.4.2026

箴言 17 : 1、15 : 17 (パワポ)

エゼキエル書 37 : 15 - 19 (パワポ)

Preface

「はじめに神が天と地を創造された」という言葉から聖書は始まりますが、天地万物をお造りになられた神は、父なる神、御子なるイエス、聖霊なる神の三位一体の神です。

私たち人間が、神から見て知っておくべきすべてのことが記されていると自ら語る聖書、その神の言葉である聖書が語る、神なるお方の最も特出した属性は、三位一体です。

神というお方は、「一体」という愛なるお方です。

父なる神、御子なるイエス、聖霊なる神というお三方がおられ、それぞれがそれぞれに神なるお方であり、それぞれに存在しておられるお方だけでも、それぞれがそれぞれに独立して神であられるお方ではなく、お三方でただおひとりであられるという、私たちの言葉や論理やこの微々たる頭で説明しようとすればするほど説明のつかない、私たちの限りある知恵や知識では到底説明のつかない三位一体なる、愛なるお方です。

その一体なる、愛なるお方がお造りになった被造物、この被造世界もまた、互いに支え合い、互いに尊重し合い、互いに循環し合う一体という愛なるものとして、「愛とはこういうものだ」と自ら自然とあらわす、体現するものとして造られました。

そして、その一体性をあらわす代表者が、人でした。

人間こそが、私たち人類こそが、三位一体の神に造られた、天地の一体性をあらわす神の似姿なる存在でした。

だから、最初に造られた人アダムとエバを形容する聖書に記されている最初の言葉が、「ふたりは一体となるのである」(創世記 2 : 24) という言葉になるわけです。

「人とは何ぞや？人間とは何なんだ？」という質問に対する最初の聖書の答えは、「一体」です。

「一体」こそが、人をあらわす人を形容する特徴であり、「一体」こそが、父なる神から、御子なるイエス様から、聖霊なる神様から、三位一体なる神様から私たち人間に期待して下さっている最も大事な神の似姿なんだと思います。

Part One

ところが、最初の人アダムとエバは、一体であることを壊してしまいました。
最も大事な、人に与えられ持っていた神の似姿を、自らの間違っただけによって壊してしまいました。

「一体」であるという神の似姿を壊してしまっただけからの人類の歴史は、元旦礼拝の時にお話ししました通り、分裂分派、散り散り、仲たがい、争い、不和こそが最たる特徴となりました。

神がお造りなされた被造世界の最も大切な、重要な、最たる特徴であった「一体」をあらわす代表者であった人は、もうそれ以上、「一体」をあらわす代表者ではなくなってしまいました。

その代わりに、不和、仲たがい、さばき合い、散り散り、分裂分派をあらわす代表者となり、神から期待されている最も大事な神の似姿とは逆の姿を大いに思う存分発揮しながら、その姿を人間世界だけに留めて置くことなく、代表者らしく、他の被造世界・森羅万象にも大いに影響を及ぼし、食うか食われるかの弱肉強食、適者生存、滅び滅ぼされる、自分で自分の首を絞めるかのような世界を作り出してしまいました。

もうこれ以上、現存するこの被造世界は、「一体」ではなくなってしまいました。

ここからここまでは私の土地、ここからここまでは私の所有と、それが当たり前であるかのように国境線を引き、地境を引き、所有権を主張し、ここからここまでは人間の世界、ここからここまでは獣の世界と、利用する時には大いに利用しながら一つの種を絶滅させてしまうほどに乱用し、支え合い、尊重し合い、循環し合うもへったくれもない世界を今も変わらず続けて作り上げています。

そのような状況を当然のように良しとはされず、心痛められた三位一体なる神様は、「一体」を壊してしまった人をお救いになり、人を救うことを通して、被造世界の一体性を今一度再創造なさろうと事を起こされました。

まず何よりも、神から離れて、自らが神のようになると主張しながらサタンの手下のように、または道具のように成り下がり、暴虐と墮落を絶えず作り出し、一つであることよりも不和を作り出し続ける罪人となった人間を、その罪から救い出すために神であられるひとり子イエスを十字架に架けなされ、人が新しく生まれる道を備えて下さいました。

「その十字架を『我が罪のためだ』と告白し、自らが神の前にあつて罪人であることを認める者たちは、イエス・キリストにあつて神の子にしよう」とすべての霊的祝福を下され、「そんな彼らが一つであることを愛をもって熱心に取り組む姿に、やがて神がすべてのものを一つになさることをお表しになる」と仰るのです。

天地の「一体」を壊してしまった人を先ずお救いになり、人を救うことを通し

て被造世界の、天地が一体である世界を再創造さなさろうと、神のひとり子イエスを十字架に架け、天にあるもの地にあるもの一切のものを、キリストにあって一つにしようと御業を成し遂げられました。

エペソ書 1 章に行ってみましょうか。

以前学んだ箇所です。

エペソ人への手紙 1 : 4 - 10 (パウロ)

主イエス・キリストによる私たちへの救いは、「私たちが救われて、はい終わり」というものではありません。

人の罪ゆえに一つではなくなってしまったこの現存する被造世界はやがて終末を迎え、天地万物一切のものがキリストにあって神にあって再び一つに集められる、三位一体なる神にあって一つとされる神のみこころの奥義へと繋がる大切な神の御業であり、また、神によって創造された天地の一体性をあらわす代表者であった人の救いは、すべてのものを再び一つとなさる上で最も大切な最重要必須条件であるということです。

ですので、十字架に架けられたイエス様ご自身が、地の汗を滴らせながら祈られた最後の祈りも、当然のごとく、「一つであるように。彼らも、わたしたち(父、御子、聖霊)がひとつであるように、一つであるようにして下さい」というものでした。

ヨハネの福音書 17 : 21 - 23 (パウロ)

十字架に架けられる前のイエス様の最後の祈り、地の汗を滴らせながら、悶えながら祈られた祈りの内容です。

「父なる神、御子なるイエス、聖霊なる神が一つであるように、彼らを一つにして下さい。わたしたち三位一体の神が一体であるように、彼らが一つとなったことを通して、世が、神を信じるようにして下さい。主の栄光をあらわして下さい。主の愛が全うされ、主の愛が知られるようにして下さい」と、イエス様の十字架の贖いの目的は、被造物を代表する人という存在が一つとなることであり、そのことこそが、すべてのものを再び一つになさる上で決して欠けてはならない、いやむしろ、必ず必要な最重要必須条件だと、イエス様祈られました。

Part Two

2026年の主題聖句を、箴言 17 : 1, 15 : 17、エゼキエル書 37 : 19 とし、テーマソングの歌詞を「乾いたパンが一切れあって平穏で、愛し合うのは、ごちそうと争いに満ちた家にまさる。見よ。わたしは彼らをわたしの手の中で一つとする」と致しましたが、なぜ、これらの御言葉が私自身の中でこうも響いたのか、果たして、これを主題聖句とすることが主のみこころに適うことなのかと考える中で、いつだったのでしょうか、「Make America Great Again」とい

う言葉が全世界に鳴り響いて、なんだか世界の空気感が変わってしまったように感じたからです。

箴言 17 : 1 と 15 : 17 の御言葉は、イスラエル王国の歴史において最も栄え、最も富み、最も周りの国々から羨ましがられるほどの栄華を極めた時代に紡がれた言葉です。

ソロモン王によって紡がれた神の言葉です。

ソロモン王は、キリスト教国ではない日本のテレビ番組の題名にもなるほどに有名な知恵と知識に長け、また、人としてこの地において経験することの出来るありとあらゆる快樂と楽しみを一寸たりとももれずに経験した、所謂、世的な観点からすればこれ程羨ましい人はいない程の羨ましい人でした。

無い物のない人、すべてを手にした人、人として手にすることの出来るすべてのものを手にした人と言っても過言ではないくらいのもを手にした人でした。

そして神様は、ソロモンがそうあることをお赦しになりました。

何のために？

人の喜びは、人の真の喜びは、この世のことではないということをその口から告白させ、書き残させ、全世界の人々に、彼のような生き様を羨ましがりながら生きることの空しさを、虚無を知ってもらうため、彼のような生き様を究極の反面教師にしてもらうためにです。

私は、ソロモンという方が確かに神に用いられ、しかも神から与えられたその知恵が離れなかったということを根拠に、確かに天国に行ったと確信していますが、中には、「あんな好き放題な生活をして、天国に行けるはずなんかない」と思われる方々もいらっしゃるぐらいに、まあ、とんでもない生活をした方でした。

で、そのソロモンが書き残した、自分の人生のすべてをかけて経験したことを基に書き残した神の言葉が、箴言 17 : 1 と 15 : 17 の御言葉です。

箴言 17 : 1 (パワポ)

箴言 15 : 17 (パワポ)

さらに 16 節、

箴言 15 : 16 (パワポ)

ソロモンという方は、「ごちそうが満ち溢れるほどあって争いに満ちた家にいるよりも、乾いたパンが一切れあって平穩である方が羨ましい」、「肥えた牛を食べまくって憎み合うよりも、質素な野菜を食べて愛し合う方が羨ましい」、「豊かな財宝がわんさかあってカオスになっているよりも、わずかな物に満足と感謝を覚えながら主なる神様を恐れる生活が羨ましい」という思いに満ち、恋焦がれるようなところを空しさ一杯に生きました。

そして神によって絞り出されるようにして、その口ついて出てきた言葉、紡い

だ言葉が、この箴言の言葉なんだと思います。

核心を突いた、何が大切で、何を大切にしなければならないのかの確信を突いた言葉だと思いますが、この核心を突く言葉が第一にされ、大事にされ、世の表舞台に出てくるような時代が、時が、今という現代を含めてあったでしょうか？

「争ってでもいいからもっとおいしい肉を、いつでも好きなだけおいしい肉を食らうことが出来るように勉強して、お金持ちになって、出世して、有名になって、いや有名になるのは面倒くさいから、有名にはならず、静かに自分だけで自分だけの富を楽しんで、神なんか信じるよりお金を信じたほうが確かだから、自分を信じたほうが確かだから、自分が自分の力で得たものを邪魔することは何があっても絶対に許さん」と、皆が、小さな子どもたちから大きな大人に至るまで、その心に抱きながら生きているような世界にあって、そのような心持ちを声を大にして全世界に、恥ずかしげもなく、むしろ堂々と正義であるかのように、もっと言いますと、神側の正義に立った主張であるかのように宣言された言葉が、「**Make America Great Again**」という言葉のように聞こえてきて仕方がありませんでした。

そして、その神の言葉に逆行するような言葉に呼応し、歓迎し、乗っかって、喜んで人々は、「**Make Japan Great Again**」、「**Make China Great Again**」、「**Make Russia Great Again**」「**Make Korea Great Again**」、「**Make Germany Great Again**」、「**Make Britain, England Great Again**」と色んな国が同じようなことを口にし、帽子を作り、Tシャツを作り、「**Make ~ Great Again**」という本がそれぞれ発刊されています。

憎み合っても、争い合っても、混乱してでも、自らの正しさを主張することが正義であるということが正しいとされ、この日本では、堂々と、「日本人ファースト」なんて言う、神をも恐れないような言葉が叫ばれるようになりました。

「日本人がより良いごちそうにありつけるために、日本人がよりおいしい肉をいつでも口にすることが出来るように、日本人がもっと豊かな財宝を持つことが出来るように」と、あたかも「隣人への思いやりなんか古臭い、そんな偽善ぶったことは追い出してしまおう」と開き直ったかのように、三位一体なる神様が再び事新たにすべてのものを一つとされることをビジョンとし、その実現を待ち望みながら、与えられたいのちと人生を小さな一つになることに尽力しながら神を恐れることを忘れていくかのようにです。

元旦礼拝の中で、神の民であったイスラエルの民たちが二つに分裂し、争い、戦うようになったことは、神の心を引き裂くかのような、神にとってこれ以上ない痛みだったという話を致しましたが、「神様にとって一番喜ばしいことは何であり、一番悲しいことは何であろうか」、私たちの信じる神様を父なる神と聖書は言いますが、「その父なる神にとって、父として最もうれしいことは何であり、

最も悲しいことは何だろうか」と考えた時、答えは一目瞭然でした。

それは、子どもたちが互いに喜びあって愛してあっていることが一番うれしいことですし、子どもたちが互いに傷つけあっていることが一番悲しいことだということです。

「父なる神にとって、『他の兄弟はどうであれ、まず、僕が私がグレイトあればいい』という姿は、なんと悲しいことだろうか」と想像しました。

Part Three

また我が家のことで申し訳ないのですが、この年末年始、私ども夫婦は風邪を引いて1週間ほど寝込んでしまいました。

私も妻も寝込んでいたので、家内が子どもたちの夕食を作ってあげることが出来ない時があったのですが、お腹を空かせている弟たちを見兼ねて、長男が弟たちを自分の車に乗せて外に出かけて、レストランに行って、弟たちに美味しいハンバーグやらピザやらを自分で稼いだアルバイトのお金を使って食べさせてあげて、帰って来た時には、なんとまあ感慨深いと言いましょうか、なんだか感謝で仕方なく、「親としてこんな嬉しいことはない」と妻と二人でしみじみ喜び合いました。

また、1月1日の元旦礼拝が終わった後、東京にいる兄の家に遊びに行くことになっていたのですが、私も家内も体調が優れず行けませんでした。

すると兄から電話があり、「お前んちの子どもたち、お年玉楽しみにしてるだろ？俺が土浦行って、子供たち連れ出して、寿司食わして、お年玉やるから待ってろ。で、帰りに、お前たち二人の分の寿司もお土産で持たしてやるから」と言って、土浦まで兄が来てくれて、本当にそうしてくれたんです。

13歳も年が離れている兄なので、私は兄にとって、ちょっと息子みたいなどころもあるかもしれませんが、我が家の子どもたちは、兄にとってはちょっと孫みたいに感じているところもあるのかなあ思うんですが、ただただ申し訳なく、ありがたくて仕方ありませんでした。

私の父は12年前に召されましたが、父にとっても、そんな子どもたちや孫たちの姿を見たら、どれだけ嬉しく、喜ばしく、ほほえましいことだろうか想像しました。

また、韓国にいて、正月に子どもたちや孫たちに会えずに寂しがっている母にとっても、会えない寂しさを超えて、なんだか心ほっこりするような、嬉しい、喜ばしい、親として感謝に思うことだろうか想像しました。

今日の説教題を「神の願い、主イエスの祈り」としましたが、神様が願っておられるのは、私たち人同士の正にこういう姿なのではないだろうか、父なる神が、子である私たち一人一人が互いに一つである姿をどれだけ熱望しておられ、待っていておられ、喜んでいておられ、互いが互いに気遣い合いながら、一つであることを大切にしようとするのをほほえましく思っておられるだろうか、また、イエス様が血の汗を滴らせながら祈られたのも、そういうことを願い、思

い描いてのことなのではないだろうかと思って、説教題を「神の願い、主イエスの祈り」と致しました。

Conclusion

神の御心とご計画を知る私たちキリスト者が、キリスト者の群れが求めるべき、祈るべき、努めていくべき愛の行いは、主にあって一つであることを体現しようと、諦めない、放棄しないことではないでしょうか。

元旦礼拝のメッセージをお聞きになっておられない方は、一度お聞き頂けますと幸いですが、元旦礼拝でお話しました通り、私たち人類は、2000年前の聖霊降臨という歴史的出来事以降、特にイエス・キリストを信じるキリスト者は、主なる神様と平和の関係に入れられた者として、人同士の、民族同士の、国同士の葛藤を平和へと変える根拠を頂きました。

イエス・キリストを告白し、神と平和の関係に入れられた者たちは、平和をつくる者でありたい、和解を成す者でありたい、一つであり、一つを成す者でありたいという内から湧き上がってくる聖なる衝動を抑制することが出来なくなりました。

なぜならば、キリストによって神との平和を持つ者とされ、すべてが一つに集められる神の国の相続者となったことを保証して下さる聖霊なる神様が、その内に、この内に住んでいて下さっているからです。

エレミヤが、神の言葉を語ることを嫌がり、恐れ、抑制し、我慢しようとしても、嫌がることも、恐れることも、抑制することも、我慢することも出来ずに使命をもって語り続けたように、キリスト者も、一つとなさる神の働きかけを抑制することは出来ません。

もし出来てしまうならば、「私は果たして、神の言葉に、神の霊に従おうとする信仰があるのだろうか、私のうちに聖霊がいて下さっているのだろうか」と疑い、神に祈り求める必要があるのかもしれませんが。

主にあって一つであることを諦めない、努めようとする、体現しようとすることには、謙遜が求められ、自己否定が先で、人を自分よりも優れた者と思うイエス様のような姿勢が問われる決して楽ではない狭い道を生きることになるでしょう。

でも、それが神の御旨であるならば、放棄するわけにはいきません。

なぜならば、それが神の御旨であると同時に、人は、神の御旨を生きた時、生きようとした時にこそ幸せであるからです。

今年1年間、テーマソングを歌い続けていく中で、その御言葉の意味を主の前に吟味する恵みの人、平和の人でありたいと願います。

お祈りいたします。

祝祷：箴言17：1、15：17